

## ライチョウ捕食者等対策等事業について

### 1. 概要

令和7年度は中央アルプス及び南アルプス北部地域（北岳周辺）において捕食者対策事業を実施した。中央アルプスでは、テン1頭及びキツネ1頭を捕獲した。南アルプスではテン2頭を捕獲した。

また、中央アルプス駒ヶ岳周辺及び他に北アルプス（長野県事業）においてサルの追い払い事業を実施した。

なお、令和7年12月15日にライチョウ捕食者等対策ワーキンググループを開催し有識者、関係者らと今後の議論を行っている。

### 2. 捕獲結果

#### (1) 中央アルプス

7月28日に駒峰ヒュッテ周辺でテンを1頭、8月21日に頂上山荘周辺（馬の背）でキツネを1頭捕獲した。いずれもカゴわなでの捕獲であった。令和6年度の山小屋閉めの際に3つの山小屋で筒わなを仕掛けたが捕獲はなかった。



写真 1-1 箱わなの周囲を通過するテン  
(頂上山荘馬の背 8/21)



写真 1-2 箱罾周辺をうろつくキツネ  
(頂上山荘馬の背 8/11)

#### (2) 南アルプス

南アルプス北部地域（北岳周辺）では、肩の小屋のみ、小屋開け時の6月上旬のみ捕獲を実施し、6月2日にテン2頭をカゴわなで捕獲した。同時にもう1頭を捕獲していたが、大きな個体でカゴわなを壊して逃走した。

### 3. これまでの捕獲実績

#### (1) 中央アルプス

中央アルプスで捕食者対策事業を開始した令和2(2020)年から6年間でテン11頭、キツネ2頭を捕獲した。

表1 中央アルプスにおけるライチョウの捕食者捕獲実績

種	令和2年 2020年	令和3年 2021年	令和4年 2022年	令和5年 2023年	令和6年 2024年	令和7年 2025年
テン	1	0	0	5	4	1
キツネ	0	0	0	0	1	1

※令和5年の集計について誤りがあり捕獲頭数4から5へ修正

#### (2) 南アルプス

南アルプスで捕食者対策事業を開始した平成29(2017)年から9年間でテン27頭、キツネ2頭を捕獲した。

表2 南アルプスにおけるライチョウの捕食者捕獲実績

種	平成29年 2017年	平成30年 2018年	令和元年 2019年	令和2年 2020年	令和3年 2021年	令和4年 2022年	令和5年 2023年	令和6年 2024年	令和7年 2025年	計
テン	8	7	3	1	4	1	0	1(筒)	2	27
キツネ	0	1	0	0	0	1	0	-	0	2

### 4. 今後の捕食者対策について

#### (1) 地域が主体となる捕食者対策の実施

第三期実施計画では捕食者対策等のライチョウ保全について、地域による地域のための事業の仕組みや体制を検討していく。

#### (2) 南アルプス等対策実施地域での目標を検討

登山者含め一般市民とも共有できるライチョウ保全を実施する。例えばライチョウを復活させたい地域を明確にするなど。

#### (3) 新規わなの開発

南アルプスでは山小屋周辺に居ついているテンを全て除去することが課題となっている。既存のわなでの捕獲が難しい個体を捕獲するため、新規わなの開発を行う。

#### (4) 普及啓発用リーフレットの作成

国立公園の特別保護地区において、新しい観点からのアプローチで始まった取り組みである捕食者対策事業について、これから対策を始めようとする山小屋関係者、一般市民らに向けたリーフレットを作成する。

## 5. ライチョウの生息状況について

### (1) 中央アルプス

令和7年度4月から6月にかけて令和7年度シーズンのなわばり調査を実施し、中央アルプス全体で 87 のなわばりを確認し、約 198 羽が繁殖しているものと推定した。令和6年度（58 なわばり計 130 羽）からさらに生息数が 1.5 倍に増加し、中央アルプスでの個体群の復活の取り組みが前進した。復活プロジェクトの開始以降、中央アルプス全体でなわばりは約 2 倍ずつ増加してきており、令和7年度の調査結果によってライチョウの生息が可能となる場所に、ほぼなわばりが形成されたことがわかった。

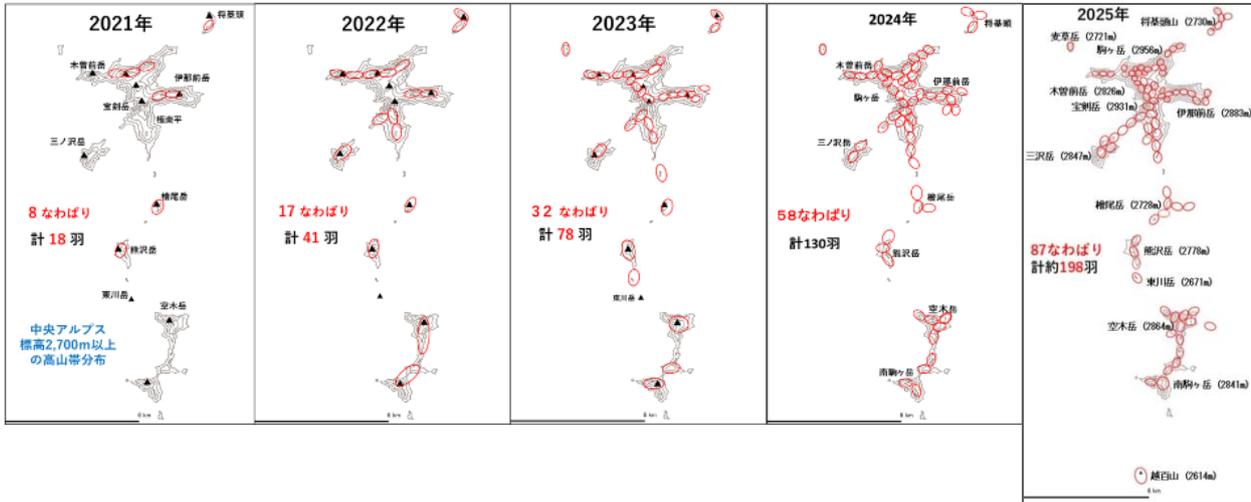


図1 中央アルプスにおける推定なわばり数及び生息個体数の年変化

### (2) 南アルプス

南アルプス白根三山地域におけるライチョウのなわばり数は、令和7年度は 24 となった。ただし、調査者が変わり、調査方法、調査努力量及び調査範囲が令和6年度と多少異なるため今年度のなわばり数はまずは参考値として扱い、令和8年度以降、引き続き調査を続け補正していく。依然として白根三山地域の特に北岳周辺は生息状況が回復していないことは変わらない。

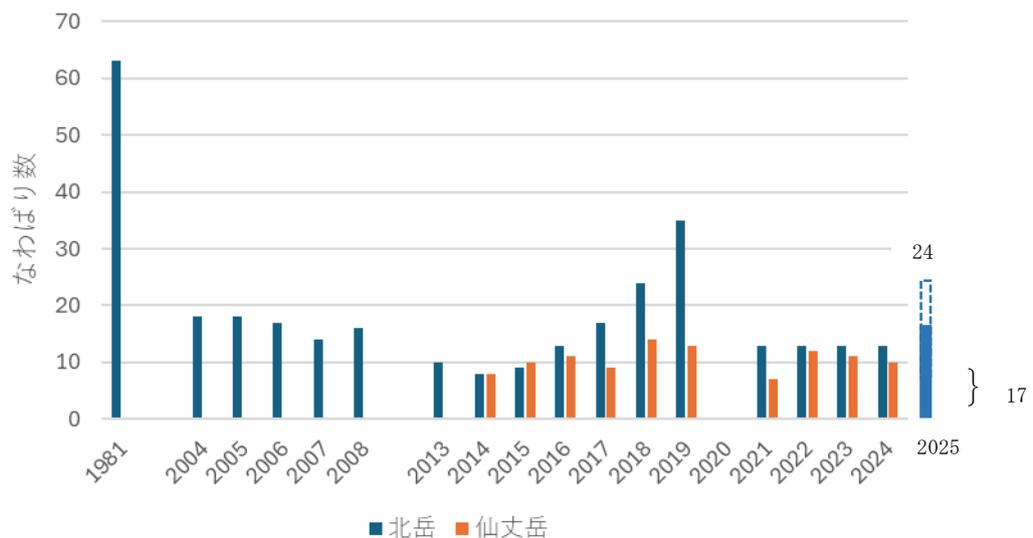


図2 北岳周辺及び仙丈岳におけるライチョウのなわばり数の変化

※2024年に実施していない間ノ岳以南のなわばり及び推定なわばりを除くと 17 となる。

## 6. サル対策について

### (1) 中央アルプスにおけるサル追い払い結果 (2025 年)

中央アルプス駒ヶ岳周辺において、6月下旬から9月下旬までの期間内において**実施数量 24 日間 43 人工 (8月までは 20 日間 39 人工)**で、実施主体は環境省信越自然環境事務所が担当して実施した。調査地の天候、過年度のサルの出現傾向からの出現予測やヤママップ等の目撃情報、ライチョウケージ保護を実施する主体からの通報、巡視時のサルの痕跡等を加味して、本年度は常駐型ではなく、スポット巡視型でかつ順応的にサル追い払いの人員を配置し、高山帯から亜高山帯へ追い払いを実施した。本事業は「ライチョウ生息域にサルを近づけないこと」「少なくとも高山帯の滞在時間を短くすること」を主目的としている。

期間内にサルは**3回 (3日) 出現した**。(いずれも7月下旬から8月中旬までに出現)

#### ○2025 年サル追い払い概況

これまで5年間でサル出現数が最低を記録したが、若干見かけの減少であることが示唆された。巡視中のサルとの遭遇は3例であるものの、巡視を行っていない期間におけるヤママップ投稿が数例あり、痕跡からサルが一定程度稜線付近を利用した形跡があった。しかしながら、かつてのように主稜線を占有する群れの出没が多発する状態にリバウンドしたわけではなく、一定程度の追い払いの学習が継続していると考えられた。

●将来のサル追い払いの手法検討のため、巡視フェーズを山小屋常駐型からスポット巡視型へ巡視の形態を移行。

●ハイマツの堅果は大凶作、ガンコウランは雪解けが遅かった場所を除いておおむね豊作である。また、クロウスゴやヒメクロマメノキなどのスノキ属の結実も平年並みかやや良好といった程度。

●サル追い期間内のヤママップでのサルの投稿数は全体の約 0.2% (24 件 (重複含む)) であった。そのうち、サル追い払いを実施した中央アルプス北部の高山帯における出現は7例であった。

●サルの痕跡数は 52 例 である。そのうち、糞の確認が 49 例、ハイマツの食痕が 3 例であった。痕跡は 7月下旬より8月下旬にかけて増加し、その後ほとんど確認されなくなった。

●中南部におけるサルの出現状況は、カメラ撮影は檜尾鞍部で 7月23日と 8月8日に各1回のみで ハナレザルと思われる。糞等痕跡も7例 (糞5例、ダケカンバ食痕1例) であった。



写真 2-1 ダケカンバの折れた枝先 (9/2)



写真 2-2 サルの群れ (8/14)

## (2) これまでの5年間の成果

中央アルプスにおけるサル追い払いを2021年に開始してから、本年で5年目になる。これらの事業を環境省、長野県、財団法人中村浩志国際鳥類研究所などが分担して業務として発注し、継続的なサル追い払いにより、巡視中のサルの出現率は大幅に減少し、高山帯におけるサルの登山者目撃はもとより、サルの痕跡（糞）自体も激減した。現時点で高山帯からサルを完全に排除はできていないものの、高山帯利用を一定程度あきらめさせたか、陰でひっそりと利用する様式に変化した。

2022年6月～9月の122日間のうち92日間（75%）の巡視を行い、サル出現の96%に対応した徹底的な追い払いを実施できた。こうして多くのサルの群れと対峙した結果、翌年は豊作であったにもかかわらず、サルの出現は大きく減少した。サルは最初のうち人を避けて早朝や夕暮れなどに高山帯を利用したり、人が近寄りにくい崖を好んで利用するなどの回避行動に出ていたが、次第に追い払われるリスクと餌を得られる効率が悪いことを学習した群れが高山帯の利用をあきらめた可能性が示唆された。現在、高山帯を高頻度で利用しているのは木曾側と黒川からやってくる2群のみであると考えられる。2024年よりこれまでのサルの学習効果を見込んで、巡視体制を順次縮小（巡視強度を75%（2022年）から20%（2025年）に削減）してどの程度サルの追い払い効果が持続するかを試みている。サルの期間内の出現日数はそれでも45日（2022年）から8日（2025年）に82%も減少したことになる。

現在のサルとの遭遇率の低さは、基本的にはサルの出現自体が追い払いを学習し減少しているためであると考えられた。ある程度施策の長期的有効性が証明されたことになる。サル追い払いの成功コスト増加はサルの減少に起因するもので、施策の現時点での成果を示していると考えられる。

表3 5年間の成果整理

	ハイマツ豊凶	糞確認数	ハイマツ堅果食痕確認数	出現日	追い払い日	追い払い対応率	巡視効率	巡視強度	サル出現率	サル追い払い成功コスト
計算式						追い払い実施日数/サル出現日数(ヤママップ出現+現地確認)	追い払い実施日数/巡視日数	巡視日数/期間合計日数	サル出現日数/期間合計日数	巡視人工/追い払い実施日数
2021年	並作	83	86	37	18	48.6% 半分未満	0.36	41%	30.3% -	5.7人日 最高効率
2022年	豊作	217	152	45	43	95.6% 非常に良好	0.47	75%	36.9% 増加	6.5人日 良好
2023年	凶作	104	18	33	22	66.7% 良好	0.35	51%	27% 低下開始	7.6人日 標準的
2024年	凶作	51	13	21	10	47.6% 半分未満	0.21	39%	17.2% 大幅低下	13.6人日 2倍以上悪化
2025年	大凶作	49	3	8	3	37.5% 改善必要	0.12	20%	6.6% 激減	14.3人日 最低効率
解説						サルは出現した日に追い払いができた割合	数値が高いほど、巡視時にサルに遭遇・対応できている	期間に対する巡視の実施割合であり、体制規模の客観的比較	期間内のサル圧力指標であり、低下すればサルの群れが減少していることを示す。	1回の追い払い成功に必要な人日投入量で、コスト効率の指標

## (3) 中央アルプスのサル追い払いから学んだこと

●強い動機と継続性、目的の明確化⇒ 「ライチョウ生息域にサルを近づけないこと」「高山帯の滞在時間を短くすること」が明確なゴール

●即応と判断力・群れ単位で考える⇒ 高山帯には最小3～最大7群が季節利用していたため、

「見えた群れだけを場当たりに追う」のではなく、どの群れをどのラインから下へ押し戻すかという空間的設計が必要

●地形と安全の理解・十分な安全管理⇒ 断崖・沢・ハイマツ帯など、高山帯特有の地形を踏まえて「人がどこまで追えるか・追えないか」を現場で即判断できることが不可欠

●チーム連携⇒ 高山帯では一人では押し切れず、「前に回り込む人」「背後から押す人」の連携がないとサルに突破されてしまう。「意識が低い＝仕事として形だけ付いて行く」状態だと、結果的に追いの強度・しつこさ・一貫性が落ち、サルから見て“たいして怖くない人間”になるリスクがある。

●慣れさせない作戦⇒ 一貫したプレッシャーをかけつつ、行動パターンを一本化しない。サルにとっての「予測不可能性」を担保する。複数の巡視員による複雑な巡視体制が成功のカギである可能性が示唆された。「サルは人間の“本気度”とパターンを学習する動物である」

●今後は、手を緩めるのではなく、きちんとしたデータを取りつつ、サルの出現が集中する時期に連続的に滞在（無言の圧力）して追い払いを行うことの重要性を改めて認識し、巡視の工程に関して検討が必要である。特に来年 2026 年はハイマツが並作以上となる可能性がある。

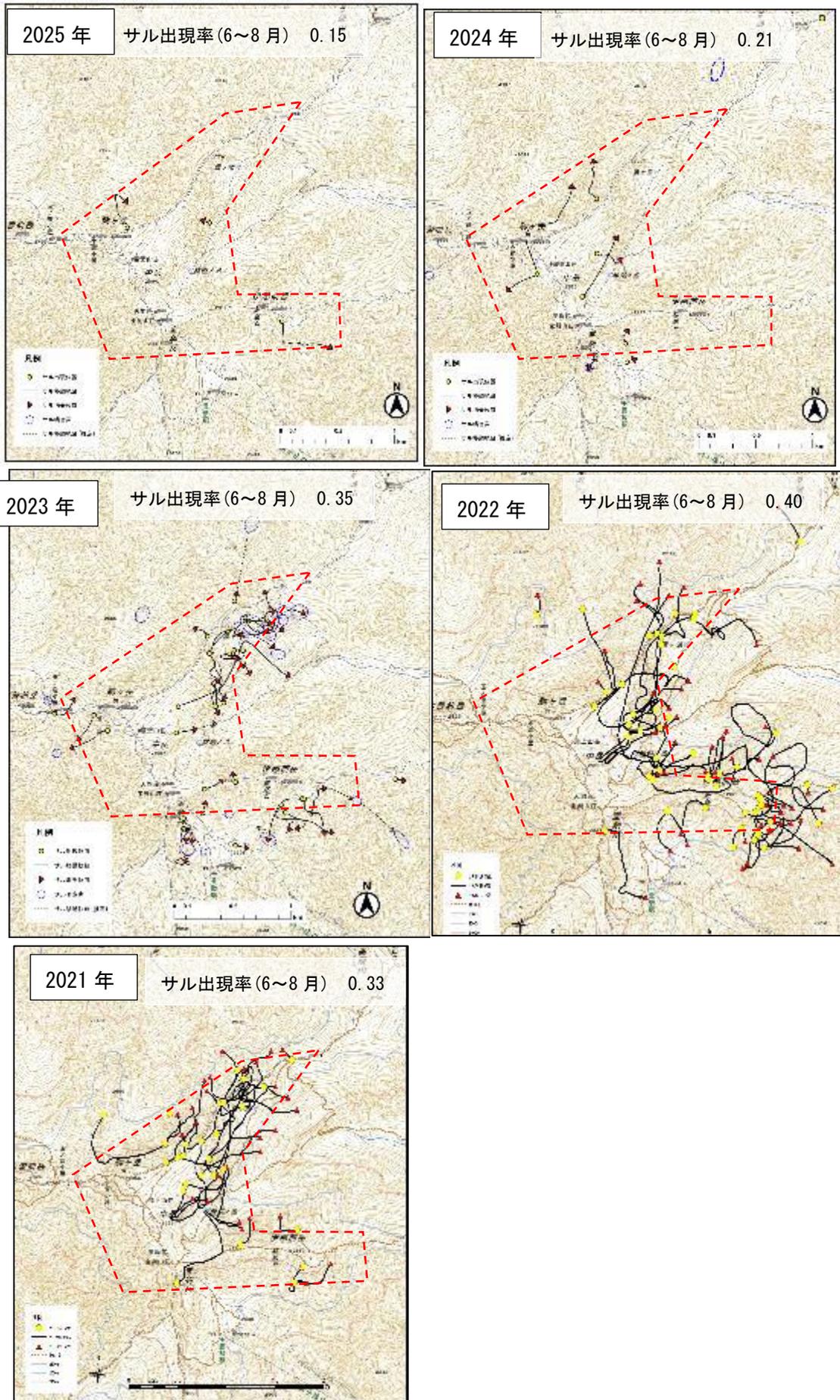


図3 過去5年間のサル追い払い軌跡図（赤枠が重点追い払いエリア）

#### (4) サル対策に関する普及啓発

令和7年8月に登山者にも協力を呼びかけるポスターを作成。サル対策により追い払いを受けたサルは、より人に対して敏感になっており少しの刺激でも追い払いが可能な状況となる。事業の実施とセットとして、より効果的に追い払いを行うために登山者にもサルを見かけたら追い払うことを呼びかけるもの。また、人と野生動物との緊張関係を再構築するきっかけとなることも期待している。

**今、手をつけなければ守れない**

里の動物が高山帯に上がり  
高山の自然と  
そこに棲むライチョウを脅かしています

**高山帯でサルを見たら  
手を叩いたり大声を出して追い払きましょう**

高山帯に侵入したサルはライチョウの餌となる高山植物を食べてしまいます

中央アルプスでは4年間の追い払いによってサルが高山帯に上がって来なくなりました

高山帯のサルを里に戻すには登山者のみなさんの協力が必要です

年	撮影頻度 (回)
2019	25
2020	22
2021	18
2022	10
2023	5
2024	2

サル追い払い開始

激減!

高山の自然を人の手で取り戻そう

環境省自然環境政策課・鶴ヶ市・富田村・中央アルプス観光(株)・富田観光開発(株)  
お問い合わせ TEL: 026-231-6573 (環境省)

令和7年7月 環境省

図4 令和7年8月に作成したサル対策ポスター